2021 年 7 月館員おすすめの本

『店長がバカすぎて』（早見和馬）

吉田　梨紗

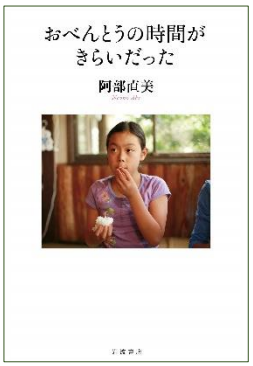
武蔵野書店で働く谷原とつかみどころのない店長とのドタバタの日々を描いています。谷原は尊敬している先輩の退職と自身の契約社員としての立場や給料の安さに、仕事のやりがいを見いだせなくなります。書店で働くということは本が好きというだけではやっていけない現実があり、普段見ることのできない書店員の大変さが垣間見えます。

真面目な谷原に対し真逆の店長はどこかのんきで、二人のやり取りはコミカルで笑いながら読み進められます。ラストに向け目が離せない展開が次々と起こり、物語に一気に引き込まれ、気が付いたらあっという間に読み終わっている面白い一冊です。

（角川春樹事務所）

『おべんとうの時間がきらいだった』（阿部直美）

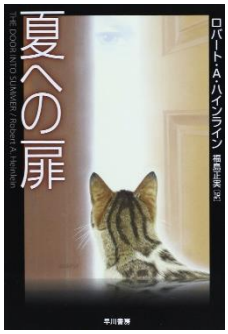
原　真由美



著者は中学時代、お弁当には愛が詰まっているものだと期待しますが、彩りのないおかずにぎょっとして蓋を閉めます。自宅には晩酌の度に怒鳴り散らす父がいて、不満をため愚痴ばかりこぼす母には娘を思いやる余裕などないのです。息苦しい生活を映し出すお弁当を「残酷だ。……自分が背負っている家族を、小さな箱と向き合うたびにいつも突きつけられる」と嫌悪します。物心ついた時から抱えていた家族との葛藤も、やがて家庭を築くことで永年の呪縛から解かれます。自身の経験から家族をテーマとし、カメラマンの夫と共に全国を回ってお弁当を食べる人を取材し様々な暮らしを見つめます。食べる人を写すのは、その先に作る人の姿が見えるからだそう。お弁当は小さな箱に詰まったそれぞれの家庭の事情が見え隠れすることも教えてくれます。（岩波書店）

『夏への扉』（ロバート・A・ハインライン）

大久保美玲



「全世界の女性を、長いあいだ家事への奴隷的束縛から解放し、いわば第二の奴隷解放宣言をするに等しい意義がある」（p.56）と自負する家事専門ロボットを開発し、友人マイルズと会社を立ち上げ、秘書兼マネージャーのベルと婚約。そんな人生の絶頂期を迎えたダンでしたが、マイルズとベルの結託により会社から追い出され、ダンの夢はもろくも崩れ去ります。全てに失望したダンは、残り少ない財産をつぎ込み、冷凍睡眠により 30 年後にタイムスリップし、年老いたマイルズとベルに復讐することを誓います。映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』などに影響を与え、現在日本でリメイク映画が上映されている本作は、後半の疾走感が非常に痛快。感動のクライマックスが待っています。愛猫ピートの忠犬ならぬ忠猫ぶりにも注目です。（ハヤカワ文庫 SF）